

濱田 仁:筑前國・宮地嶽神社の鎮火祭と「モ」

日本の多くの古社には古い神事が伝わるが、福岡県北部の宮地嶽神社にも、神社の推定では鎌倉時代以前、古墳時代にまで遡る可能性のある「鎮火祭」という神事が毎年大晦日の夕方に行われる。火魔や一年の厄を祓い浄める神事であるが、この神事では、水、海砂とともに、「モ」と呼ばれるホンダワラ科の海藻、ジョロモクが鎮火に使われる。ここでは、この神社の歴史を述べ、「モ」が鎮火に用いられる意味を、宗像大社の鎮火祭と比較し、合わせて古代朝鮮半島とのつながりを「モ」の語源を通して考えてみたい。

1. 宮地嶽神社

古事記(太安万侶・稗田阿礼 712)や日本書紀(舎人親王 720)に登場する神功皇后は、第 14 代仲哀天皇妃、第 15 代応仁 天皇の母で、4~5世紀にかけて実在した女性とも言われる。両親も不思議に思うほど幼少時から美しく、仲哀天皇崩御の後、臨月の身で朝鮮新羅に遠征して勝利し、軍神としての人気は西日本随一である。彼女を祀る神社は多く、福岡市と北九州市の間、福津市にある宮地嶽神社もその一つである。神社から 30 分ほど登った宮地嶽山頂に小さな古宮があって、傍らの由緒書きには、彼女がここで八百万の神々に祈願して大陸へ出帆し、偉業がなった事を称え、彼女を祭神とする宮地嶽神社が創建された事が説明されている。

古宮を下ると、宮地嶽神社の上方数百 m の一帯に「奥の宮八社」があり、30分もあれば一回り出来る。このうち、3番社の不動神社は6世紀末~7世紀初めの古墳(図1)で、国の指定史跡である。古墳の前に赤屋根の拝殿があり、提灯で照らした内部はうす暗い。 奥を覗くと縦横高さが各数 m の巨石が左右を囲み、全長23 m という横穴式の石室の奥に祭壇が置かれている。奈良県明日香村の石舞台古墳に似ているが、石舞台より1 m 長く、全国第二の規模である。上部に盛り土をした円墳上部は朝鮮慶州の円墳よりはやや平たく、樹木が茂る。被葬品には、朝鮮百済から来た緑色ガラス製の丸玉やガラス板、金銅製の馬具など国宝も多く(九州国立博物館展示)、被葬者は、宗形族の首領で宗像大社大宮司家の祖、しかも娘を天武天皇に嫁がせ高市皇子を外孫に持つ宗形徳善と推定されている。

宮地嶽神社から宗像大社への田舎道には数十の古墳群がある。 海人族が住み、漁業や海軍力に秀で、朝鮮中国との交易が盛んで、 農地にも恵まれたこの地は、古来、天皇家や蘇我氏に匹敵する力 を持った大豪族が支配し、海藻文化も育まれたのであろう。

現在、宮地嶽神社には大層立派な楼門(図2)や、大きな注連縄を飾った拝殿があり、奥に本殿がある(図3)。これらは昭和初期に建てられたが、いずれも大きくて立派である。地元の人達の神社に対する信仰の厚さと経済力の大きさを感じる。神社宮司の浄見家は、神仏習合で山岳信仰の修験者・山伏の家系で鎌

倉時代初期にさかのぼり、当代の譲氏は40~45代目だそうだ。

2. 宮地嶽神社の大祓式, 除夜祭と鎮火祭

平成20年の大晦日の午後。境内,本殿に向かって右側(南側)の一角には、竹を四隅に建て、細い注連縄を張った10 m×7 m程の長方形の斎場(図3)が設置されていた。斎場内,本殿と反対側の西の海側に祭壇が設けられ、神職達がお供えを置いて準備していた。最上段後方には、紙のついた榊が立てられた。これは神様が降臨される依代の御幣であろう。神饌(神様の食事)として、祭壇の上段前部には鯛、米、酒、中段には水と塩、種々の野菜、スルメと昆布、果実類、下段には水、玉串、そして木綿と麻の布が置かれていた。

祭壇に向かって左側には、鎮火祭で使われる水を入れた直径約30 cm の銅製の瓶、ホンダワラ科のジョロモク、そして砂を盛った三宝が置いてあった(図4、図5)。

大祓式・除夜祭・鎮火祭は、昔は旧暦大晦日に行われたが、今は新暦大晦日の午後5時から行われる。地元の消防団員数人と約50人の氏子などが集まり、儀式が始まるのを待つ。暗くなり始めた午後5時過ぎに白い衣に黒い冠、薄茶色の笏を右手に持ち、浅沓を履いた神職が一列になって斎場に着いた。先頭は若い女性神職で、後に浄見宮司など6人の男性神職が続く。斎場に着くと、まず1年の厄を祓う大祓式が始まった。一人の神職が「天岩戸を押し開き・・・、天の八重雲を・・・」などと祝詞を上げると(図4)、他の神職が遥か古代から聞こえて来たような低い声で「おー、おー」と呼応する。その後、二人の神職が麻と木綿の布を引き裂き箱に入れて大祓式が終わり、神職が交代で祝詞を上げ、除夜祭もいつしか終わった。

夕闇迫る午後 5 時 20 分頃から鎮火祭が始まり, 浄見宮司が祝詞を上げた。斎場の一角に直径と深さが共に約 30 cm の穴が掘ってあり, 中には松葉や松笠が入っている。点火すると, 火が勢いよく燃え上がり, 数 10 cm の火柱が立つ (図 6)。宮司がたすき掛けになり, 燃え上がった火に, 最初はヒサゴで水をかけ (図 7), 次にモ (ジョロモク) をかぶせる (図 8) と, もうもうたる煙が立ち上る。その後, 女性神職が砂をかけ (図 9), 最後に残った水を全部かけると, 煙も治まり完全に鎮火した。こうして, 鎮火祭自体は 10 分程で終わった。

その後、斎場の周りで見守っていた数十人の参詣者が、半紙に包んだ約2cm四方に細かく切った紙片を受け取り、皆がそれを自分の体にかけて今年一年の厄を祓い、身を浄めた。次いで、年末に際して浄見宮司が、「今年一年暗いニュースが多かったが、宮地嶽神社の神様のご加護で、来年は皆さんにとって良い年になりますように」という趣旨の話をされた。その後、神職全員が先程の女性神職を先頭に一列に並んで引き上げ、神事は総て終わった。我々



図 1-9. 宮地嶽神社. 1. 宮地嶽神社摂社の不動神社 (左下) と, 1741 年に発見された横穴式の円墳 (右上)。多くの重要文化財・国宝が出土し、被葬者は7世紀の豪族、宗形徳善と推定されている。 2. 宮地嶽神社の楼門。 3. 大晦日、鎮火祭準備中の斎場。後方は、拝殿と大注連縄。 4. 斎場内の机上には右から水 (円形容器)、海藻ジョロモク (三宝)、海砂 (三宝) が並ぶ。 5. 三宝の上のジョロモクなど。 6. 鎮火祭で火が燃え上がったところ。 7. 鎮火祭で水をかけているところ。 8. モ (ジョロモク) を被せて鎮火。 9. 海砂をかけて鎮火させる。この後、もう一度水をかけて完全に鎮火させる。

参詣人は並んで神子さんから白酒を頂いたが、日没の遅い福岡も、いつしか大晦日の日は完全に落ち、境内はすっかり夕闇に包まれた。

3. 宗像大社の鎮火祭

話は前後するが、宮地嶽神社から北北東に約7kmの宗像大社

では、12月15日に近い日曜日、朝6時からの古式祭(木村・濱田 2009)に続き、朝10時から鎮火祭が行われる。宗像大社では、消防関係者は数十人も参加し、一般の氏子の参加者よりも多い。 鎮火祭は、拝殿の中で行われ(図10)、3人の綺麗な衣冠束帯姿の神職が中央に進み出て、まずは火をおこし、よく燃えてから、水、



図10. 宗像大社の鎮火祭。「モ」の代わりに、川菜(セリ)が鎮火に用いられる(写真は宗像大社提供)。

川菜 (セリ),砂を用いて火を鎮めて消火した。宗像大社の鎮火祭が宮地嶽神社の鎮火祭と異なるところは、日時や神職の衣装が異なる他に、ジョロモクの代わりに川菜 (セリ)が使われる事と拝殿の中で行われる点であった。

4. 考察

神道の根本である禊やお祓いをして身を浄めるには、いろいろな方法がある。裸のまま海に入ったり(宗像大社の大祭など)、ホンダワラ類を使ったり(島根県佐太神社など、濱田 2008)、アカモクを食べたり(木村・濱田 2009)、海砂を使ったり(福岡北部の志賀海神社)する。鎮火祭の際、水・ホンダワラ類・海砂で火を鎮めるという考え方は、それらと共通して、火魔を鎮め、祓い浄める意味も持っていると思われる。日本の古社の神事には古人の生活習慣や信仰が残っているとすれば、実際、火事が出た時、古人は水で消火し、最後には海藻や砂をかけて火魔を鎮め、厄を祓ったのかも知れない。

延喜式(藤原・藤原 927)の祝詞には,鎮火祭の記載がある。即ち、伊佐奈美能命が八百万の神々を生み、最後に火結神を生んだ際、陰部に大火傷を負って亡くなった。しかし、心悪しき火結神を生んだ際、陰部に大火傷を負って亡くなった。しかし、心悪しき火結神を生んだ事が気になり、もう一度生き返って、水神、匏(瓢箪を半分に割って作った水を汲む容器)、川菜、埴山姫(土を意味する)の4種の物を生んで、心悪しき子(火結神)の荒ぶる心を鎮めようとした。これに似た話は日本書紀(舎人親王 720)や古事記(太安万侶・稗田阿礼 712)にも見えるが、宮地嶽神社では、川菜の代わりに海藻ジョロモクを使っている。これは延喜式(927)以前のやり方をそのまま伝えている可能性がある。神社の伝承に依ると、宮地嶽神社は古墳時代の神功皇后の故事に因んで創建された。また、7世紀初頭の宗形徳善の墓とされる古墳もあるし、付近には他にも数十の古墳がある。従って、鎮火祭自体も古墳時代の生活や宗教

を反映して発生したかなり古い神事である可能性もある。それに対して、宗像大社の鎮火祭は、明治になってから始まったという事で、中央が出した延喜式に忠実である。それは、宗像大社の祖、宗形徳善が娘を天武天皇に妃として出すなど、中央との結びつきを深めていた事にも表れているようである。

鎮火祭に用いるホンダワラ科近縁の海藻については、1種類だけではない。しかし、それらは皆、『モ』と呼ばれている。朝鮮半島南部および西部ではホンダワラの事を「mol」、藻類全体を「mal」と言うが、音が大変近く、『モ』と同語源であろう。海藻の文化、特にホンダワラ類については、食文化だけでなく宗教面にもわたって、朝鮮半島との密接な関係が古来あったのかも知れない。

5. まとめ

福岡県福津市にある宮地嶽神社は、約1600年前に活躍したと言われる神功皇后を祭神として祀る。この神社では、鎌倉時代以前、古墳時代に遡る可能性のある鎮火祭が毎年大晦日の夕方に行われ、その際、ジョロモクやホンダワラ科の海藻(単に、モと呼ぶ)が真水や海砂とともに鎮火に使われる。島根県や福岡北部では、海水・海砂やホンダワラ科の海藻を浄めやお祓いに使うが、宮地嶽神社の鎮火祭に使われる海藻にも、火魔を祓い浄め、一年の厄を祓う意味が込められていると考えられる。

また、消火に使われるホンダワラ科の海藻を、神社及びその周辺では単に「モ」と呼ぶが、これは、朝鮮半島南部、及び南西部で称される「mol」の派生語と考えられ、朝鮮半島と福岡北部との古い文化的つながりが推定される。

謝辞

本調査においては、浄見譲宮司を始め宮地嶽神社の神職の方々にお世話になった。また、宗像大社関係者には図 10 の写真を拝借した。国立科学博物館の北山太樹博士と株式会社 IDD の木村光子氏からは、貴重な助言を頂いた。また、本稿の一部は、日本海藻協会講演集に掲載し(濱田 2009)、同会会長・有賀祐勝先生から転載許可を頂いた。これらの方々に心から感謝したい。

引用文献

藤原時平・藤原忠平 927. 延喜式・祝詞. (武田祐吉校注. 1958. 古事記 祝詞 pp. 428-430). 日本古典文学大系. 岩波書店.

濱田 仁 2008. お祓いの起源ホンダワラ類と出雲の佐太神社. 藻類 56: 35-38

濱田 仁 2009. 日本人と海藻利用 — 神代への旅 — 日本海藻協会秋季 藻類シンポジウム講演集 pp. 10-25.

本村光子・濱田 仁 2009. 宗像大社の古式祭とアカモク. 藻類 57: 7-9. 太安万侶・稗田阿礼 712. 古事記. (倉野憲司校注 1958. 古事記 祝詞 pp. 60-61; pp. 228-229). 日本古典文学大系, 岩波書店.

舎人親王 720. 日本書紀(坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注). 日本古典文学大系. 上巻 1967, p. 89; pp. 330-331. 岩波書店.